

2015年度「教育実習Ⅱ」報告と 「保育・教職実践演習（幼）」に向けた課題

A Report of “Teaching Practice–II”(2015) and Issues
for the “Practical Seminar for the Teaching and Child-Care Specialist”

佐藤 有香
SATO, Yuka

キーワード：教育実習、保育・教職実践演習（幼）、実践報告

はじめに

本学では、幼稚園教諭一種免許状取得にあたって、「教育実習」5単位のうち、幼稚園における学外実習4単位分を「教育実習Ⅰ」2単位と「教育実習Ⅱ」2単位に分け、事前事後指導を1単位として設定している。「教育実習Ⅰ」は、開学以来本学独自の実習体制で、隣接している宝仙学園幼稚園にて約3か月間、週2回隔週行われている。また「教育実習Ⅱ」は、宝仙学園幼稚園または学生居住の近隣地域の私立幼稚園で10日間実施するよう計画されている。本学の教育実習は、「教育実習Ⅰ」で約3か月間の長期型の実習と「教育実習Ⅱ」で10日間の集中型の分散型実習を経験すること多様な経験の蓄積が大きな特徴である。

そこで本稿では、「教育実習Ⅰ」終了時の課題を明らかにし、その結果を踏まえ、2015年度の「教育実習Ⅱ」の事前事後指導からの本実習の経過を報告すると共に、今後の本学の「教育実習」のあり方について検討していきたい。

I 本学の「教育実習」の分散型実習について

幼稚園教諭一種免許状取得のためには、「教育実習に係わる事前及び事後指導」で1単位、学外で行う実習で4単位取得が必要である。この学外の実習は、4週間の実習が必要であり、養成校の教員養成の考え方により4週間で1度に集中して行う集中型の場合と、1週間と3週間あるいは2週間と2週間に分けて行う分散型に大別される。本学では、前身の宝仙学園短期大学からの独自の実習体系を継承し、Table 1（菱田，2011）に示す通り分散型の実習を実施している。宝仙学園短期大学時代

では、幼稚園教諭二種免許状取得に向け、2年次に4月～12月までの長期間、隔週で20回を超える日数を隣接する宝仙学園幼稚園で実習を行う形態をとっていた（菱田，2011）。このような教育実習の成果の蓄積を継承し、本学においても宝仙学園幼稚園において約3か月、週2回隔週、1クラスに複数名の実習生が配属されるグループによる長期間の実習と、2週間の外部への私立幼稚園での実習と組み合わせ実施している。このような実習形態から学生が、長期的な実習で一人ひとりの幼児理解を深め、外部の実習では多様な幼稚園教育に対応する力を養っていくことが、本学の「教育実習」の特徴である。

II 「教育実習Ⅰ」終了時点での課題

上述の通り、「教育実習Ⅰ」は3年次12月に終了し、評価伝達により学生一人ひとりの今後の自己課題を明らかにし、その後「教育実習Ⅱ」の事前指導が開始された。2014年度の反省を踏まえ（こども教育宝仙大学教職年報第5号参照）、「教育実習Ⅱ」の事前指導は、「教育実習Ⅰ」の評価伝達終了時点から、「教育実習Ⅱ」に向けた準備、実習目標・課題設定等を進めていった。また、「教育実習Ⅱ」の「事前事後指導」の内容は、「教育実習Ⅰ」終了時点の学生の課題や困難等、学生の実態に沿うよう、「教育実習Ⅰ」の自己評価と振り返り（自由記述）の結果を踏まえ授業内容を構成した。「教育実習Ⅰ」終了時の自己評価の集計と各項目の振り返りの結果は、Table 2、3の通りである。

Table 2は、「教育実習Ⅰ」終了時点の学生による自己評価の集計結果である。評価項目は、①教育者としての資質（7評価内容）、②環境整備（1評価内容）、③指導技術（6評価内容）、④部分実習指導案（4評価内容）、⑤研究態度（3評価内容）の5項目全20評価内容から構成される。

全ての項目の集計結果をみると、責任感をもって行動する、協調性をもって行動する、常識的な態度をもって行動する、興味・熱意がある等、実習生としての態度や意欲に対する項目では、7割以上が良いレベル (B) 以上に達しているという評価であった。

その一方で、①教育者としての資質の項目では、幼児の考えや行動を理解し掌握できる、指導性をもって行動する、②環境整備の項目で、環境への配慮については、目標レベルに達した (C) から目標レベルに達した (B) に対する評価が、大半を占めていた。また、③指導技術の5つの評価内容と④部分実習指導案の4点の評価内容全てにおいても、目標レベルに達した (C) から目標レベルに達した (B) の評価が7割以上という結果であった。さらに、⑤研究態度項目の記録の整理ができるでは、8割以上の学生が、目標に達していない (D) から良いレベルに達した (B) の評価であった。

以上のように「教育実習Ⅰ」終了時の学生の評価では、教育者としての資質に関する意欲や態度については、実習期間を通して、大半の学生は優れたレベルから良いレベルという評価をし、一定のレベルに達しているという認識であった。しかし一方で、保育実践における、幼児理解や集団や個別の指導について、指導案の立案、実施、教材研究等では、目標レベルに達していないから良いレベルという評価が大半であり、「教育実習Ⅱ」に向けての課題としてあげられた。

次に、「教育実習Ⅰ」終了時の自由記述による自己評価の結果についてである。項目は、①実習全体を通しての自己評価、②教材研究についての自己評価、③子どもの側に立ち、指導すること・集団での保育についての自己評価、④チームワークについての自己評価の4点で、自由記述による評価を求めた。結果は Table 3 に示す通りである。

1点目は、①実習全体を通しての自己評価についてである。「教育実習Ⅰ」を終えて、総合しての自己評価の中で、最も多かった記述が、【指導計画や記録について】と【個別の援助や配慮の重要性について】の記述であった。記録に関しては、「考察の書き方や内容を簡潔にまとめることが困難である」という記述がみられた。また指導案については、「個別の配慮が実習を重ねることで書くことができるようになった」という実習経験の中で自分自身の感触として記録の力が付いたという認識の結果がみられた。「教育実習Ⅰ」では、約3か月という実習期間を通して、子どもや担任と実践を重ねていく。その中で、子ども一人一人の成長過程や特徴を理解し、担任と子どもとのかかわりから援助の在り方について学びを深めていく。そこで、記録の書き方や指導案作成時の個別配慮の記述が容易になっていくと推測できる。

次に多い記述は、【子どもとの信頼関係の構築について】であった。これは、「学生が実習当初は子どもとの信頼関係の構築に難しさを感じていたが、子どもと3か月向き合うことで信頼関係の構築につながった」という記述である。「教育実習Ⅰ」では、約3か月の実習期間に、実習生は丁寧に一人一人の子どもの特徴や成長を捉えることができ、また子どもの立場では、ゆっくり時間を掛け、実習生がどのような存在なのか、自分の事を受け容れてくれる存在なのか判断することが可能である。この長期間の実習形態が両者にとって信頼関係を築いていく上では、有益になったのではないかと考える。

続いて多い記述は、【ねらいを意識した関わり】と【グループによる実習】についてである。【ねらいを意識した関わり】は、指導計画において活動を通して子どもに経験してもらいたいと考えるねらいを踏まえた上での指導の難しさについての記述である。実習の段階では、立案した活動を子どもと共に実施することで精一杯になってしまう傾向がある。しかし、「教育実習Ⅰ」では自分以外のメンバーが活動を行う姿や自身の実践を他のメンバーと省察する中で、活動を通してのねらいを意識するようになり、そのねらいを意識して活動を実践することの難しさを認識してきているのだろう。

次に【グループによる実習】の記述では、グループという形態による実習に対する、肯定的な記述と否定的な記述である。「他のメンバーから学ぶことができた」等、グループによる実習を肯定的に捉えている記述がある一方、「班員同士の連携がうまくいかなかった」等、メンバーとの連携や協力が上手くいかず、否定的な記述もみられた。

最後に【個別の指導と全体の指導について】と【子どもの前に立つ経験】等の記述がある。【個別の指導と全体の指導について】は、部分実習や責任実習の中で、一人一人の子どもの姿を見ながら、全体の活動を進めていくことの難しさに対する記述であった。また、【子どもの前に立つ経験】では、「子どもの前に立つ機会が多くあり、力になった」等、実習期間を通して子どもの前に立つ経験を重ねることでの記述であった。

2点目は、②教材研究についての自己評価の結果である。この項目では、【環境設定について】、【子どもの実態把握不足について】、【子どもの姿の予測不足】の3点が主な記述としてみられた。

【環境設定について】は、活動を行う際に、教材配布の順番や使用教材の強度等を十分検討していないことで、実際に子どもと活動を実施した際の課題についての記述である。

【子どもの実態把握不足】の記述では、「目の前の子どもの興味や発達に沿った活動内容の立案の難しさ」、「子

どもの目線に立った教材の選択の重要性」等、活動を実際に行い気づいた、細かい子どもの発達の特徴や興味、関心の重要性に対する内容であった。

また【子どもの姿の予測不足】は、指導計画立案時に活動中の子どもの姿の予想が不足していたという記述である。記述例としては、「ゲームの活動時のシミュレーション不足、子どもの姿の予測が十分ではなかった」、「子どもの活動時の予測の重要性に気づいた」等があげられた。

3点目は、③子どもの前に立ち指導すること、集団保育についての自己評価についてである。この項目は、実習期間を通して実際に子どもの前に立ち、担任に代わり活動を行った経験からの評価についての記述である。この項目で最も多い記述は、【全体に対する指導と個別への指導について】であった。これは、①実習全体を通しての自己評価の中での同様の記述がみられたが、活動を行う際に、子ども一人一人に対する個別配慮をしながら、全体の活動を進めていくことの難しさに対する記述である。保育において、子ども一人一人の思いや姿が基本にあるという認識はあるが、活動を進める中で個別の配慮を行いながら、どのように全体の活動を進めていけば良いか、その調整に対して困難を感じているのであると考える。

次に多い記述の項目は、【子どもへの伝達】である。これは、実際に活動を進めていく中で実習生が子どもに対しての説明や伝達の際に、言葉の選択や言い回しが、子どもには理解が難しかったり、指示が伝わらなかった経験からの記述である。この項目は、実践を経験するまで、殆どの学生がさほど配慮することが無かったであろう事柄だが、実際に子どもの前に立ち話をする中で、子どもが理解できるように伝達することの難しさを感じての結果だと推測する。

最後に【子どもの姿、状況からの関わりについて】、【子どもの姿の予測】、【活動のねらい、意図について】の項目があげられた。【子どもの姿、状況からの関わりについては】は、立案した計画の想定される子どもの姿と実践の中での子どもの反応や行動が予測と異なる場合に対して、その状況や子どもの姿を第一に保育を展開することの重要性の気づきに対する記述である。また【子どもの姿の予測】は、②教材研究についての項目と同様に、活動中に想定される子どもの姿の予測不足に対する記述である。【活動のねらい、意図について】の項目では、①実習全体を通しての自己評価の中でも同様の記述がみられたが、活動を展開していく中で、ねらいや保育者の意図を踏まえての指導の難しさについての内容であった。

4点目に④チームワークについての自己評価である。

この項目は、全体の記述結果からチームワークが【良好であった】、【困難であった】、【実習期間に変化があった】の3点に分類された。まず【良好であった】に分類された記述では、「班員同士意見を出し合い、考えることができた」、「チームという意識があり、徐々に協力して、保育をより良いものへと変えていくことができた」等があげられ、複数のメンバーで実習を重ねる中で、良好な関係を築き、一人の実習では経験できない気づきや学びが何えた。

また【実習期間に変化があった】の分類では、実習を重ねる中で、良好な方向に変化のあったグループと、反対に実習当初はチームワークが良好であったが、徐々に困難になっていったという両方の変化についての記述がみられた。

他方【困難であった】という記述は、「リーダーとして、班をまとめることに責任を大きく感じて、一人で悩んでしまった」、「自分の担当以外は、非協力的だった」のように、一人の班員に多くの役割が集中してしまったり、チームとして機能していないグループがみられた。グループによる実習の形態は、グループ内で役割分担を行い、他のメンバーとコミュニケーションを密に取り協力しながら実習を進めることで、連携のあり方や他者の姿から自身の保育に活かす等の教育的意図が期待されている。上記のように、実習を進める中でチームでの経験が効果的に働くチームがある一方で、グループ内でのコミュニケーションに問題が生じたり、役割分担が上手くいかず一部の学生に過重な負担が生じる等の課題もみられた。この点については、今後「教育実習」全体として検討する必要がある。

Ⅲ 「教育実習Ⅱ」の事前指導の内容

以上のように「教育実習Ⅰ」での自己評価の結果から課題や反省点を踏まえ、「教育実習Ⅱ」の事前指導の内容を以下の通り設定した（Table 4）。

事前指導の授業内容について、「教育実習Ⅰ」終了時の課題としてあげられていた①記録（日誌、考察）、②子どもの実態把握、③指導計画、の3点に焦点をあて授業内容を構成した。

1点目の①記録については、日誌の書き方として、時系列での1日の記録、事例と考察を中心に指導を行った。「教育実習Ⅰ」終了時点での課題として、時系列の記録では、子どもの行動や保育者のかかわりのみを記述しており、保育者のかかわりの意図や援助の配慮に関して十分な記述がみられない等があげられた。さらに事例と考察では子どもとのかかわりや、自分自身の指導のあり方について、事例の中で記されていても、考察の中では援

助の方法や指導法に対する反省や課題についての記述が目立ち、子どもがなぜそのような反応だったのか、内面をどのような思いだったのかという行為の考察が少ない傾向がみられた。

そこで、これらの課題を踏まえ、記録の書き方として、具体的な記述、保育者の意図や配慮について、実習生としての気づき、事例の書き方、事例を踏まえての考察の書き方を授業内で扱った。授業では、時系列の記録の内容で、実際に幼稚園の生活の様子を写した映像を観て、保育者、子どもそれぞれの動きを記録に起こし、学生同士で添削を行い、その上で教員が添削を行った。添削の際は、具体的な記述、保育者の意図や配慮に視点を置き行った。また、事例と考察でも上記と同様に映像を観て、エピソードを書き、そのエピソードに対する考察を書き、添削を行った。

2点目は、②子どもの実態把握の内容である。「教育実習Ⅰ」終了時点での学生の自己評価の中でも、「子どもの発達段階の把握不足」や「子どもの興味、関心に沿った教材選択の重要性」等が課題としてあげられた。そこで、授業内では、3歳児から5歳児までの子どもの一般的な発達を捉え直すことを目的に、生活面、興味・関心、人間関係の3視点から特徴について再度確認を行った。また、指導計画の作成に向け、実際の子どもの姿からどのような発達段階であるか、現在の興味や関心は何か等、それらを捉える際の視点について説明を行った。

3点目は指導計画立案についてである。「教育実習Ⅱ」では、責任実習を実施するため日案の作成に焦点をあて、登園から降園までの流れが立案できるよう指導を行った。「教育実習Ⅰ」終了時点で、子どもの姿、ねらいと内容の捉えが曖昧、活動を進める際の予想される子どもの想定が十分でない等の課題がみられた。これらの点を踏まえ、再度子どもの姿、ねらい、内容の3点の要点を確認し、実習で配属予定学年の主活動を含めた登園から昼食時までの指導案作成を行い、教員による添削を行った。

IV 「教育実習Ⅱ」の実施結果

本年度の「教育実習Ⅱ」は、4年次生87名、科目履修生1名の計88名が、75ヶ所の私立幼稚園において、基本的に2015年6月1日(月)～6月12日(金)の10日間の日程で実習を行った。実習先の園行事や体制等により、上記の日程を前後する学生もいたが、7月上旬までに全ての学生の実習が終了した。最終的に88名の学生が実習を実施し、85名の学生が実習を終えることができた。3名の学生については、家庭の事情、体調不良等の理由で中止となった。本年度は、実習開始前週の土曜

日(5月30日)、実習期間中の土曜日(6月6日)には、図書館、ピアノ練習室を開放し、教材研究、部分実習、責任実習の活動内容の準備等を行える体制を整えた。

V 「教育実習Ⅱ」事後指導内容

実習を終了した学生は、幼稚園での実践での学びの振り返りを行うため、以下の日程、内容で事後指導を実施した(Table 5)。事後指導では、次にあげる主に4点を中心に振り返りを行った。

1点目は、実習全体を通しての自己評価である。ここでは、〈教育者としての資質〉、〈環境・指導技術〉、〈部分実習・責任実習の指導計画と評価〉、〈記録〉、〈総合評価〉の視点から各項目についてS(秀でたレベルに達した)からD(目標に達していない)の5段階による評価と評価項目ごとに所見の記述を求めた。その際に、自己評価の意義、PDCAサイクル等、実践と省察との関連について説明を行った。

また、今後の自己課題を明らかにすることを目的に、保育者の基礎力として〈知識〉、〈技能〉、〈マナー〉、〈人間性〉、〈生活力〉、〈実務〉の6視点から、チャート作成による自己評価を行った。その結果を踏まえ、課題を明らかにし、今後卒業迄に実施できる行動目標をあげた。

2点目は、グループに分かれての実習園についての振り返りである。今回学生が実習を行った園は、全て私立園であり、教育方針、保育形態、特色等、様々であった。そこで、多様な特徴を持った私立幼稚園の理解が深まるよう、少人数のグループに分かれ、以下の点について話し合いを行った。話し合いでは、①幼稚園についての理解(園の概要、保育方針、保育内容、環境、1日の生活の流れ)、②子どもへの理解(各学年の遊びや活動、生活場面等の子どもの姿)、③保育者の職務内容(保育場面での役割、保育以外での役割)、④子育て支援・地域とのかかわり・保護者との連携についての理解(子育て支援事業、保護者との連携等)の4点を中心に行った。グループでの話し合い後には発表を行い、全体で多様な幼稚園の特色について理解を深めた。

3点目は、責任実習についての振り返りである。「教育実習Ⅱ」では、園の事情により実習生の担当時間に差はあるが、全員、担任に代わりに一定の時間を担当し活動を行う責任実習を行った。園の先生方との反省会での指導や意見を踏まえ、再度自分自身で振り返り、どのような点を配慮すべきだったか、改善すべき点はどこだったか明確にするため、子どもの実態把握からのねらい、内容の設定、子どもの活動の予測、実習生の援助や配慮、活動の流れ、教材研究、環境構成等の視点から評価と反省、今後の課題について記述を行った。

4点目は、秋学期に予定されている「保育・教職実践演習（幼）」の授業に向け、今後卒業までに保育者として必要な資質・能力について、以下の項目に対する自己の課題やさらに学びたい事柄を記入した。質問項目は、①教職の意義、教師の役割、職責、職務内容について、②挨拶や言葉遣い、社会人としてのマナーなど、社会性について、③特別な支援を必要としている子どもの対応について、④クラス運営や子どもの安全、健康管理について、⑤幼稚園という組織の一員として、⑥保護者や地域との連携、子育て支援について、⑦記録や指導計画について、⑧子どもの発達、幼児理解について、⑨保育技術について、⑩その他である。

これらの質問項目に対し、今後卒業までに身につけることが求められる事柄として、子ども一人ひとりの特徴や発達の理解、並びに集団やクラス全体の子どもの育ちの理解、特別な配慮の必要な子どもに対する理解、保護者との連携の仕方、対応、職員同士の連携のあり方、連絡帳や日々の保育日誌の書き方等があげていた。そこで、これらの結果を踏まえ、4年次秋学期に開講される「保育・教職実践演習（幼）」の授業内容を構成した。

Ⅵ 今後の課題

以上、本稿では、「教育実習Ⅰ」終了時の課題を明らかにし、その結果を踏まえ、2015年度の「教育実習Ⅱ」の事前事後指導から「教育実習Ⅱ」の経過を報告した。以下にこれらの「教育実習Ⅱ」の実施結果を踏まえ、今後の課題、実習の在り方について述べる。

今回の「教育実習Ⅱ」終了後の園からの総合評価では、8割以上の学生が教員としての資質、必要な技術、技能に関して目標に達するレベル（B以上）の評価を得られた。これらの評価が得られた学生に関しては、「教育実習Ⅰ」終了時点から、各自が「教育実習Ⅰ」での課題を明確にし、その課題解決に向け、事前準備を進め、「教育実習Ⅱ」へ臨むことができたからではないかと考える。事前準備の段階で、課題を意識して取り組んでいる学生については、実習開始前には実習に対する期待や抱負を述べ、実習終了時点で、今後卒業までに身に付けることが必要とされる課題が明確であり、幼稚園教諭に対するイメージがより明確になり、大学での学びと実践での経験が統合している様子が伺えた。

しかし、一部の学生は「教育実習Ⅰ」終了時から、自己評価を客観的に行うことが難しく、自己課題も曖昧な者があり、これらの学生は、事前指導の段階で準備や姿勢が十分でない部分がみられた。「教育実習Ⅰ」の実習形態は、グループでの実習になるため、一部の学生はグループのメンバー同士で指導案作成や日誌の記録の際に

協力して作成している姿がみられた。学生がお互いに協力して実習を行うことは、学生同士で様々な意見や方法を検討する等、教育的効果が期待できる反面、自分の力で考える事が困難な学生にとっては、他者に依存し、個人的な学習が蓄積されていないことが予想される。

以上のように、「教育実習Ⅰ」の実習形態による、学習の積み重ねは個人差が伺え、その後の「教育実習Ⅱ」での学びにも影響を及ぼしていることが推察される。今後は、グループによる実習形態、内容について教育成果を再度検討し、「教育実習」全体を通して学生が身に付けることが期待される学習内容を一人ひとりが確実に習得できるような方法や形態を検討していきたい。さらに、学生が保育実習を含め、4年間の実習での学びを系統立て、蓄積できるよう学内全体でのカリキュラム編成を考えていくことが必要であろう。

引用文献

菱田隆昭（2011）「教育実習Ⅰ」から「教育実習Ⅱ」への連続性 子ども教育宝仙大学教職課程年報第2号 pp. 14.

Table 1 「教育実習」関連科目の実施時期・目的及び内容

実施時期	科目名	実習の目的・内容
3年次 秋学期	教育実習 I	①保育者や子どもの活動、保育者と子どものかかわりなどを理解し、幼児教育を深める ・保育者の保育の意図や配慮を知り、反省会などで発言できる ・子どもとのかかわりを通して、様々な場面の子どもの姿や発達について理解を深める ②指導案を立案・実践し、反省とアドバイスを通して、環境構成のあり方や計画と実践の関係について学ぶ ・宝仙学園幼稚園の教育方針を理解する ・子どもの姿の知見をもとに、様々な場面での保育の指導案を立案できる ③グループで協力して保育を実践し、保育への理解を深める ・グループで協力して指導案を立案・実施、反省とアドバイスを行うことができる ・他者の保育を客観的にみることができ、次の自分の保育に活かすことができる ④実習を通して、保育者としての自覚を深めるばかりでなく、保育者の役割、職務内容について学ぶ ・幼稚園の環境構成、教材管理などについて知る ・幼稚園の社会的活動（子育て支援など）を知る
	教育実習 事前事後指導	①教育実習 I を実施するための事前及び事後の学習をする ②教育実習を単に観察や技術の習練のみに終わらせず、平常の教育課程の一環としてこれらを深める ③実習生の教育観、保育観、倫理観の形成や専門職員としての職責、基本姿勢を身につける ・教育実習のねらいを自覚する ・実習の準備として、心構えを作り、実習目標・課題設定、保育教材の準備、指導案作成、実習録の書き方などを行う ・事後の学習として、評価伝達、振り返りや報告会を行う
4年次 春学期	教育実習 II	①幼稚園教諭としての必要な資質や技術を習得する ②幼稚園における家庭との連携のあり方を学びながら、子どもへの理解を深める ・子どもの発達に即した援助のあり方を学ぶ ・1日の指導計画を作成し、実践する ・保護者とのコミュニケーションの方法を学ぶ ・幼稚園教諭に求められる資質や技能に照らし合わせて自己の課題を明らかにする
	教育実習 事前事後指導	①教育実習 II を実施するための事前及び事後の学習をする ②教育実習を単に観察や技術の習練のみに終わらせず、平常の教育課程の一環としてこれらを深める ③実習生の教育観、保育観、倫理観の形成や専門職員としての職責、基本姿勢を身につける ・教育実習のねらいを自覚する ・実習の準備として、心構えを作り、実習目標・課題設定、保育教材の準備、指導案作成、実習録の書き方などを行う ・事後の学習として、評価伝達、振り返りや報告会を行う

Table 2 「教育実習Ⅰ」を終えての自己評価の集計結果(人数)

項目	評価内容	S (秀でたレベル に達した)	A (優れている レベルに達した)	B (良いレベル に達した)	C (目標レベル に達した)	D (目標に達して いない)	計
教育者としての資質 (意欲・態度)	幼児の考えや行動を理解し 掌握できる	0 (0%)	6 (6.5%)	43 (46.7%)	39 (42.4%)	4 (4.3%)	92 (100%)
	指導性をもって行動する	0 (0%)	7 (7.6%)	37 (40.2%)	37 (40.2%)	11 (12.0%)	92 (100%)
	責任感をもって行動する	3 (3.3%)	31 (33.7%)	31 (33.7%)	22 (23.9%)	5 (5.4%)	92 (100%)
	協調性をもって行動する	5 (5.4%)	36 (39.1%)	30 (32.6%)	17 (18.5%)	4 (4.3%)	92 (100%)
	常識的な態度をもって行動 する	5 (5.4%)	36 (39.1%)	37 (40.2%)	12 (13.0%)	2 (2.2%)	92 (100%)
	意欲的な態度をもって行動 する	9 (9.9%)	34 (37.4%)	33 (36.3%)	13 (14.3%)	2 (2.2%)	91 (100%)
	守秘義務など職業倫理規定 を理解して実践できる	24 (26.1%)	40 (43.5%)	21 (22.8%)	6 (6.5%)	1 (1.1%)	92 (100%)
環境整備	環境への配慮が考慮できる	0 (0%)	10 (10.9%)	39 (42.4%)	34 (37.0%)	9 (9.8%)	92 (100%)
指導技術	効果的な保育内容を理解し、 実践できる	0 (0%)	7 (7.6%)	40 (43.5%)	35 (38.0%)	10 (10.9%)	92 (100%)
	臨機応変な処置ができる	1 (1.1%)	4 (4.3%)	29 (31.5%)	44 (47.8%)	14 (15.2%)	92 (100%)
	個々への子どもへの指導が できる	0 (0%)	9 (9.8%)	29 (31.5%)	45 (48.9%)	9 (9.8%)	92 (100%)
	子どもの集団への指導が できる	1 (1.1%)	4 (4.3%)	30 (32.6%)	38 (41.3%)	19 (20.7%)	92 (100%)
	実習課題の到達を見据えた 実習の実践ができる	0 (0%)	7 (7.6%)	33 (36.3%)	42 (45.7%)	10 (10.9%)	92 (100%)
部分実習 指導案	指導目標を理解している	1 (1.1%)	22 (23.9%)	37 (40.2%)	26 (28.3%)	6 (6.5%)	92 (100%)
	内容及び教材の研究が できる	1 (1.1%)	7 (7.6%)	37 (40.2%)	36 (39.1%)	11 (12.0%)	92 (100%)
	指導案の立案と実施が できる	0 (0%)	21 (22.8%)	28 (30.4%)	37 (40.2%)	6 (6.5%)	92 (100%)
	教材・用具の準備が できる	4 (4.3%)	20 (21.7%)	33 (36.3%)	30 (32.6%)	5 (5.4%)	92 (100%)
研究態度	興味・熱意がある	12 (13.0%)	37 (40.2%)	28 (30.4%)	15 (16.3%)	0 (0%)	92 (100%)
	記録の整理ができる	3 (3.3%)	12 (13.0%)	26 (28.3%)	40 (43.5%)	11 (12.0%)	92 (100%)
	自己の今後の課題を明確化 にできる	5 (5.4%)	24 (26.1%)	41 (44.6%)	21 (22.8%)	1 (1.1%)	92 (100%)

Table 3 「教育実習Ⅰ」を終えての自由記述による自己評価

項目	記述例	件数	
1 実習全体を通しての自己評価	【指導計画、記録について】	<ul style="list-style-type: none"> 文章での日誌や記録のまとめに苦労した 日誌での考察の書き方が今回の実習で理解できた 日誌の考察欄は何を書いても良いかまともならず、学んだことや反省しか書けなかった 	6
	【個別の援助や配慮の重要性について】	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの性格や発達段階を通して、その子どもにあった配慮や援助の大切さを学んだ 個別配慮の必要性を知り、子ども一人一人にかかわり幼児理解を深めたその上でどのような配慮が必要か考え子どもにあった対応を行った 	6
	【子どもとの信頼関係の構築について】	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係の構築の難しさを感じていたが、子どもと3か月向き合うことで信頼関係の構築ができた 長く子どもと関わることで信頼関係の構築につながった 	5
	【ねらいを意識した関わりについて】	<ul style="list-style-type: none"> 実習を重ねる中で、指導計画のねらいや保育者の意図を踏まえての指導をすることでできるようになった 	4
	【グループによる実習について】	<ul style="list-style-type: none"> 他のメンバーの姿から学ぶことができた チームのメンバーに反発している部分もあり、協力が十分でなかった 班員同士の連携がうまくいかず、そちらに気をとられて、子どもの姿をみることが不十分になってしまった 	4
	【個別の指導と全体の指導について】	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの個々の姿をみて、全体での指導が難しかった 全体での指導の難しさを感じた 	3
	【子どもの前に立つ経験について】	<ul style="list-style-type: none"> 以前は苦手だったが子どもの前に立つ経験を積むと慣れてきた 子どもの前に立つ機会が多くあり、力になった 	2
【その他】	<ul style="list-style-type: none"> 実習を重ねる中で子どもが活動に楽しんで参加してくれるようになった 	1	
2 教材研究についての自己評価	【環境設定について】	<ul style="list-style-type: none"> 教材配布の順番等環境設定の甘さ 事前の環境設定を十分でなかったため、子どもが戸惑ってしまった 見本を1つしか用意しなかった事で、子どものイメージが固定された 	11
	【子どもの実態把握不足について】	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの目線にたった教材の選択の重要性 子どもの発達段階の把握不足（視覚的情報の方が理解しやすい等） 目の前の子どもの興味や発達にそった活動内容の立案の難しさ 	11
	【子どもの姿の予測不足について】	<ul style="list-style-type: none"> 活動時のシミュレーション不足、子どもの姿の予測が十分ではなかった 子どもの活動時の予測の重要性に気づいた 	11
	【その他】	<ul style="list-style-type: none"> 活動を行う上での、意図や目的の理解不足 活動を進める際の伝達の仕方不足 教材選択の際のアレルギー児の対応等 	5
3 子どもの前に立ち指導すること 集団保育についての自己評価	【全体に対する指導と個別への指導について】	<ul style="list-style-type: none"> 全体に対する指導をしながら、個別の配慮をすることの難しさ 全体の子どもの様子を把握する視野の広さの大切さ 個別の指導に集中してしまい、全体での指導が困難であった 	16
	【子どもへの伝達について】	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが理解できる伝達の仕方の配慮ができていなかった 子どもが理解できる説明の仕方や言葉がけの難しさを感じた 子どもに分かりやすく伝える力の不足を感じた 	10
	【子どもの姿、状況からの関わりについて】	<ul style="list-style-type: none"> 最終の責任実習では、子どもの状況をみながらの指導ができた 指導計画通りに進めるのではなく、子どもの様子を見ながら臨機応変に対応することの大切さに気づいた 子どもの気持ちを受け止め、寄り添うことの大切さを学んだ 	4
	【子どもの姿の予測について】	<ul style="list-style-type: none"> 予想される子どもの姿の想像がまだできていないことに気づいた 活動中の子どもの姿の予測不足 	3
	【活動のねらい、意図について】	<ul style="list-style-type: none"> 活動のねらいや意図を踏まえた指導の困難さ 子どもの反応から活動のねらいをどう進めていくかの難しさを知った 	2
4 自己評価 チームワークについての	【良好であった】	<ul style="list-style-type: none"> 徐々に協力して、保育をより良いものへと変えていくことができた 指導案の読み合わせ、シミュレーション等、常に情報共有できた 班員同士意見を出し合い、考えることができた 	13
	【困難であった】	<ul style="list-style-type: none"> リーダーとして班をまとめる事に責任を感じて、一人で悩んでしまった 自分の担当以外は、非協力的であった メンバーからのアドバイスに対して、反発したり、口論になることもあり、助言がいかせなかった 	10
	【実習期間に変化があった】	<ul style="list-style-type: none"> 途中までは協力体制であったが、メンバーの中で全く反応しなく責任実習の頃にはメンバーの協力が困難になった 初めは各自が学んだことを共有することが難しかったが、徐々にお互いの保育を見て、何が足りないのか伝え合うようになった 	5

Table 4 2015年度「教育実習Ⅱ」事前指導の日程及び内容

指導回	日 程	内 容
第1回	2014年12月18日	・「教育実習Ⅱ」に向けての心構えについて
第2回	2015年1月15日	・実習園配属先発表、個人票の下書き（自己課題を含む）
第3回	2015年3月30日	・事前指導に向けて、（個人票清書、提出に向けて）
第4回	2015年4月7日	・「教育実習Ⅱ」について 実習生個人票清書他
第5回	2015年4月14日	・事前オリエンテーションについて ・記録：日誌の書き方①（実習日誌配布）
第6回	2015年4月21日	・記録：日誌の書き方②（具体的記述、保育者の意図・配慮、実習生の活動、事例と考察） ・個人目標（3点）最終確認
第7回	2015年4月28日	・記録：日誌の書き方③（子どもの映像視聴→時系列での記録→事例と考察→添削） ・課題学習→幼児の姿から発達をとらえる（3歳児～5歳児）
第8回	2015年5月12日	・添削後の日誌について（文章表現、具体的記述、保育者の配慮等） ・訪問指導教員との面談について
第9回	2015年5月19日	・添削後の事例・考察について ・指導計画作成①（子どもの姿、ねらい・内容の設定、子どもの姿を捉える視点）
第10回	2015年5月26日	・指導計画作成②（子どもの映像視聴→ねらい・内容の設定→登園～昼食時までの指導計画作成→添削） ・実習直前指導（実習欠席時の連絡方法、実習期間中の授業欠席届け等）

※実習期間：2015年6月1日（月）～6月12日（金）

Table 5 2015年度「教育実習Ⅱ」事後指導の日程及び内容

指導回	日 程	内 容
第11回	2015年6月16日	・お礼状について ・自己評価について（自己評価とは、自己評価による振り返り） ・実習終了報告書①について
第12回	2015年6月23日	・実習終了報告書②について ・チャートによる今後の自己課題
第13回	2015年6月30日	・グループによる実習振り返り①（幼稚園の概要、子どもの理解、職務内容、子育て支援、地域とのかかわり、保護者との連携についての話し合い）
第14回	2015年7月7日	・グループによる実習振り返り②（話し合い、グループごと発表準備）
第15回	2015年7月14日	・グループによる実習振り返り③（全体発表） ・責任実習について指導案立案、実施、評価についての振り返り ・評価伝達
第16回	2015年7月21日	・「保育・教職実践演習（幼）」に向け、今後保育者として必要な資質・能力とは ・評価伝達

※実習期間：2015年6月1日（月）～6月12日（金）